日本山岳会
越後支部報

第　14　号
平成27年10月１日
発　行　日本山岳会越後支部
発行者　遠藤家之進正和
新潟県新潟市南区鷲ノ木新田1049
TEL・FAX 025－362－5004
広報委員長　本間　一人

私の一枚

「流れる雲」

撮影目的で入山し、竜門小屋に泊っていました。

朝、目が覚めて窓の外を見ると空が赤く染まっていました。私は、急いで三脚とカメラバッグを持ち南寒江山まで走りました。何とか間に合いシャッターチャンスをモノにした私の傑作です。

撮影場所

朝日連峰　竜門山1,687m

撮影　**小田　捷寿**

会津の山と辻一

森沢　堅次

平成二十七年五月二十三日、福島県喜多方市「いいで荘」で越後支部総会があって、恒例の講演会が催された。辻一（つじまこと　一九一三～一九七五）について話すことができたのはファンの一人として得難い機会であった。

辻一は会津藩の武家田口姓に縁がある。実弟若松流二が山の雑誌アルプに小出から会津若松まで国鉄只見線に乗った紀行を書いている。兄の辻一がよく会津の山奥を跋渉したのは先祖のアイヌの血のせいではないかと。同文の中に会津戦争の折、祖母に当る人が夫を戦乱で失い、娘を連れて江戸の親類筋に身を寄せ、そのまま辻姓となったとも。

辻一はアルプで軽妙な文章とユーモラスな絵を多く発表し読者を魅了した。また「山からの絵本」「山の声」等の絵本仕様の豪華本が創文社や東京新聞出版局から発行されて、今でも古書市では高価で知られている。

引馬峠、鬼怒沼山、帝釈山等北関東と奥会津の山域についての山の文は十二編に及び、日光国立公園となった針葉樹林帯をぬっていた古い登山道を単独行で行く姿を彷彿とさせる。

山とスキーと金鉱探しの根拠地を銀座松屋の裏のビルの五階におき、画家・文章家・登山家・評論家・詩人あるいは千三ッ屋マコベェ・三師・居候の名人とも言われたが、謎の多い人生が明らかにされたのは、二冊の本による。「夢幻の山旅」（一九九四　西木正明）、「山靴の画文やまことのこと」（二〇一三　駒村吉重）。「アルプ二一八号特集辻まこと」（創文社　一九九四）では全く触れられていない辻一の自死の事が克明に述べられている。一読をすすめたい。

二十三歳の辻直生は、一年後に母良子も同じ胃癌で失い、両親の墓を福島県川内村長福寺に自然石の墓を建立した。村内に天山文庫を寄付した草野心平の縁である。

JAC越後支部 第一回情報交換・交流会開催について

越後支部 支部長　遠藤　家之進正和

初秋の候、支部会員の皆さまにおかれましては、益々ご清栄のこととお喜び申し上げます。

さて、越後支部では今年度から、新しく集会委員会が発足いたしました。今後、会員の方々が個々に抱く山・自然・生活文化等を語り合う交流の場として集会委員会活動を行いたいと思っております。会員皆さまのご理解とご協力をお願いいたします。

第一回の活動を左記の場所において行いますのでご案内いたします。

記

一　日時

平成二十七年十月三十一日（一五時）～十一月一日

二　場所

村上市高根　天蓋高原

悠遊山荘（高根集落から広域農道北中・高根線）

※会場までの略図別紙

三　会費　一人一、〇〇〇円

（イワナ塩焼き・トン汁を準備します）

四　持参品

日帰り登山装備・寝袋・嗜好品・食器

五　参加申し込み

十月二十二日まで　遠山　實

電話　〇二五四－七三－〇四六七（夜）

六　日程

十月三十一日　一五時三〇分～一六時三〇分

支部長あいさつ

講演「山との出会い」　桐生　恒治

講話「天蓋高原定点観察場のドウラク」　遠山　實

懇親会　十七時～

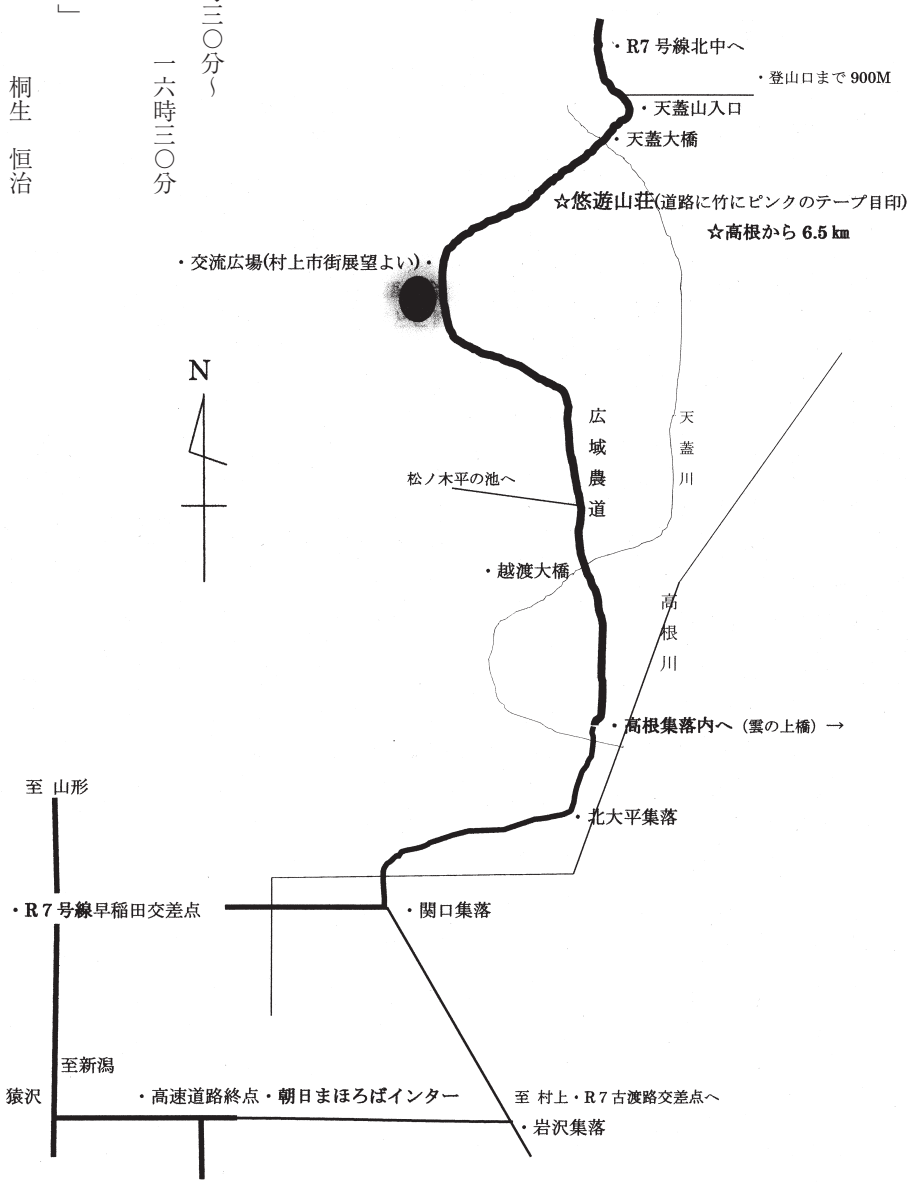
十一月一日　七時朝食

八時三〇分～天蓋山登山（山頂九時三〇分着）

一一時解散

七　その他

不明の点についての問い合わせは遠山實までお願いします。



ナムチャバルアとチベットの東

桑原　勇蔵

昨年ダウラギリとアンアンプルナの氷河をみてきたので、今年は年々急速に後退してゆく氷河のまだ豊富に残っている「チベットの東」に行ってみようと計画した。

同行するのはいつもの三夫婦組。チベットと中国の接する地域。中国の政策でこの付近もチベット自治区になっているが、現地のガイドも言っているように自治とは名ばかりである。一切は中国政府の管理下にあり、その一方的な政策に反抗してインドに逃れたダライラマでわかるようにたびたび反乱の起こる政治的に微妙な地域。

中国政府の警戒も非常に厳しく空港検査も厳重だ。空港によっても違うが八一（バーイー）の空港は世界一で一番厳しいそうである。時限爆弾に利用されるとかで電池類や携帯電話は持込要注意。

まず雲南省の梅里雪山（メイリセッザン）を眺めるため、昆明（クンミン）からシャングリラの空港へ行き、そこから徳欽（デーチン）、飛来寺（フェライス）へと向かった。ここは高度三、五〇〇m、目の前に梅里雪山が見える。梅里雪山は別名太子十三峰ともいい、六、七四〇mの主峰カワゲボをはじめ六、〇〇〇m峰が十三山続く連山である。カワゲボは雲南省最高峰。白い山を意味するカワゲボはチベット人から神の山としてあがめられている。一九九一年京都大山岳会と中国隊との合同登山隊が雪崩で遭難し、その後小林尚礼さんが十年くらいかけて遺体捜索した。はじめは神の山を冒涜したためと非難していた村人も小林さんの真摯な態度に心を許し「シャオリン」といって協力するようになった。そのためか梅里雪山の麓のこの明永（ミンヨン）村は私たちにも他の所とは違い大変親しくしてくれた。明永村のロッジに泊まったときは夕方薄暗くなって村を散歩していたら、遠くからやっと人影が見えるくらいなのに「コンニチハ」と声かけてくれる。他所では「コリアか」等といわれるのにここでは日本人が泊まっているというのが、村人に知れ渡っているようだ。ロッジでは小林さんのときのだと思うが日本の歌を流してくれた。曲は「恋人よ」、「ピンクレディ」、「昴」だった。

鋭くとがった三角錐のカワゲボは豊富な氷河が二、七〇〇mの樹林帯まで流れ込んでいる。その隣の連山の一つメツモも美しい切っ先が天を突いている。

いずれもまだ未踏峰。未踏峰はここだけでなく、六、〇〇〇m峰は雲南省だけでも二十数座あるがいずれも未踏峰。さらにこれからでかける「チベットの東」地域には六、〇〇〇m峰が二百七十座あり、そのほとんどが未踏峰だという。その理由はこの地方が中国での非常に政治的に微妙な地域で入るのに容易ではないこと。したがって未開発でアプローチも難しい。更にチベット人からは神聖な神の山として聖域化していて登山の対象になりにくい（登山許可がえられない）こと。それらのことでまだ手をつけていないすばらしい山の宝庫である。

「最後の辺境・チベットの東」は中村保さんがなんといってもこの地方の先駆者であり、世界的にも第一人者でもある。この言葉の命名も中村氏によるものだ。

今回の旅も中村氏のご紹介でいつも中村氏のガイドをする四川大地探検有限公司の張さんが色々と入域許可をとるのに苦労していただいた。

例年この地域に入っておられる中村氏も今年は政治的に微妙で、入るのが困難だと断念されたという。

当初雲南から陸路で入ろうとしたが、とうてい無理だとなり、シャングリラ空港でようやく間に合った入域許可書（空港止めで送達、間に合った）を手に、一旦ラサまで空路をゆき、ラサから陸路「チベットの東」に戻ることにした。

この地域は「空白の五マイル」といわれるヤル・ツアンポー大峡谷のあるところで、ナムチャバルア（七七八二）と対岸にあるギャラペリ（七二九四）との間はわずか三十キロしか離れていないが、その下標高二、二〇〇mの谷底をツアンポー川が大屈曲を描いている、高度差五、五〇〇m（中国側の公称では六、〇〇九m）の深いゴルジュの国。この大屈曲のためツアンポー川がヒマラヤの山中へと吸い込まれてはゆくが、どこへ流れてくるのか確認できずに「幻の渓谷」となっていた。四年ほど前、日本人の角幡唯介さんが探検し「空白の五マイル」という本を出した。

ナムチャバルアはチベットの最高峰。日本と中国の合同登山隊が登頂しているが、チョモランマが登られてしまっているので、中国にとっては入山料の取れる最後の虎の子というわけで入山料が一億円かかったそうだ。

そのナムチャバルアは標高五、〇一三mのミラ（米垃）峠から眺めた。ギャラペリは良く見えるのだが、ナムチャはツアンポー川からの上昇気流で絶えず雲が湧き上がり、もうちょっとなのだが、なかなか顔を見せてくれない。最後までねばって日の落ちる寸前にほんの一瞬キラッと頭が輝いた。

最終目的地のラウへ泊まり、ラゴー氷河とミドイ氷河へ出かけた。本来われわれ外国人は幹線道路（川蔵公路＝四川から西蔵まで）から脇道へは許可されていないのだが、四川大地探検のいわゆる応用問題とかで何とか入れた。（ただし日本語ではあまり話すなといわれた。どうせ、すぐバレるだろうけれども、どうしても必要なときは少しでも現地人に見えるよう「タシデーレ＝今日は」「トウチェジェ＝ありがとう」とチベット語で言っていた。）この地域は氷河が豊富でここだけで、ヨーロッパアルプスの氷河量に匹敵するという。

川蔵公路は中国がチベット制圧のため軍隊でつくったものだが、当時一km作るのに一人の犠牲者が出たというほどの険しいところ。谷側は二～三〇〇m下を白い泡をかんだ谷底が流れている。現在でもいたるところ軍隊での道路工事中、六、七時間待たされるのはよくあるという。我われもやられ朝七時からえんえん午後二時まで待たされた。しかし、それも「エンジョイ、トラブル」と割り切るしかない。

平成二十七、二十八年度の新役員任務分担

五月二十三日に行われた平成二十七年度越後支部総会において、支部役員の改選が行われ、役員の互選により支部三役と各委員長が決定承認されました。その後、七月五日の三役委員長会議において、各副委員長と専門委員についての指名と了解を得ました。新役員の任務分担は次の通りです。

支部長　遠藤家之進正和（新・新潟市）
副支部長　桐生　恒治（新・見附市）
副支部長　佐藤レイ子（新・新潟市）
事務局長　後藤　正弘（新・上越市）
◎委員長（事業）小山　一夫（再・新潟市）
○副委員長（事業）成海　修（再・新潟市）
委　員（事業）佐藤レイ子（再・新潟市）兼務
委　員（事業）鬱本　修一（再・糸魚川市）
委　員（事業）森沢　堅次（再・会津若松市）
委　員（事業）小林　頼雄（新・弥彦村）
委　員（事業）滝沢　信子（新・五泉市）
◎委員長（集会）遠山　實（新・村上市）
○副委員長（集会）立入　清（新・上越市）
委　員（集会）桐生　恒治（新・見附市）兼務
委　員（集会）田中　栄弘（新・長岡市）
委　員（集会）佐竹　信幸（新・会津若松市）
委　員（集会）佐藤　邦雄（新・魚沼市）
◎委員長（広報）本間　一人（再・新潟市）
○副委員長（広報）齋藤トモ子（新・新潟市）
委　員（広報）佐藤　芳英（新・田上市）
◎委員長（自然保護）吉田　理一（再・魚沼市）
○副委員長（自然保護）松井　潤次（新・小千谷市）兼務
委　員（自然保護）多田　政雄（再・新潟市）兼務
◎委員長（図書）高辻　謙輔（再・新潟市）
○副委員長（図書）齊藤　宣雄（新・新発田市）
◎委員長（県山協）多田　政雄（新・新潟市）兼務
委　員（県山協）桐生　恒治（新・見附市）兼務
委　員（県山協）松井　潤次（新・小千谷市）兼務
◎委員長（総務）後藤　正弘（新・上越市）兼務
委　員（総務）佐藤レイ子（新・新潟市）兼務
委　員（総務）菊入　好子（新・長岡市）
監　事　森　庄一（再・長岡市）
監　事　遠藤　俊一（再・新潟市）
顧　問　山崎　幸和（再・燕市）
顧　問　橋本　正巳（新・上越市）

専門委員会

支部の各種行事を遂行するために、各専門委員の委員長、副委員長及び専門委員のメンバーは、次の方々が担当されますのでご紹介いたします。

一　事業委員会

小山一夫委員長、成海修副委員長、佐藤レイ子委員、鬱本修一委員、森沢堅次委員、小林頼雄委員、滝沢信子委員

高頭祭、海のウエストン祭、他支部交流会、公募登山の登山行事や活動の企画実施など。

二　集会委員会（新設）

遠山實委員長、立入清副委員長、桐生恒治委員、田中栄弘委員、佐竹信幸委員、佐藤邦雄委員

支部会員の親睦登山など、共益事業に係る登山活動の企画、実施など。

三　広報委員会

本間一人委員長、齋藤トモ子副委員長、佐藤芳英委員

会報「越後支部報」発行の企画編集、各種行事の広報連絡など。

四　図書委員会

高辻謙輔委員長、齊藤宣雄副委員長、石山政雄委員

図書、地形図、登山資料等の「藤島蔵書」や他山岳書の整理管理とその有効活用促進、支部機関誌「越後山岳」や「支部報」への情報提供など。

五　自然保護委員会

吉田理一自然保護委員長、松井潤次自然保護副委員長、多田政雄委員

自然保護パトロールや清掃登山、自然保護集会や自然観察会などへの参加や企画実施、環境破壊などの調査など。

六　県山協委員会

多田政雄委員長、桐生恒治委員、松井潤次委員

県内山岳団体を統括している新潟県山岳協会と一体関係にあり、友好関係の堅持継続を構築し各種事業や活動の相互協力など。

七　総務委員会

後藤正弘委員長、佐藤レイ子委員、菊入好子委員

支部会員に係る全般統轄管理、支部会費の徴収及び会計管理業務、委員長会議・役員会・支部総会の招集開催報告、支部年次晩餐会の企画運営、本部提出資料の作成報告、本部及び各支部との情報交換など。

●第三十二回全国支部懇談会を越後・岩室温泉で開催します

第三十二回全国支部懇談会を越後支部主催で開催します。多くの皆様の参加をお願いします。（詳細は別紙チラシをご覧ください）

開催日　二〇一六年四月九日(土)～十日(日)
開　場　岩室温泉　ゆもとや
会　費　一六、〇〇〇円
親睦登山　弥彦山

★お知らせ

山岳写真展が直江津駅前の「直江津まなびの交流館」で開催されています。この行事は県山岳協会の主催で越後支部は共催で開催しているもので十月五日(月)までで、今後は県庁や関川村での開催が予定されています。お近くに行ったさいは是非お立ち寄り下さい。

編集後記

本間一人

記事の投稿を御願いしているにもかかわらず遅くなったりで大変申し訳なく思っています。登頂記録や山麓でのひと時、随想など是非お寄せ下さい。表紙の私の一枚も写真データーと文章も添えて御願いします。

越後は細長く他県に往来するには必ず峠を行き来しなければなりません。そして、長い県境には幾つもの峠が存在します。縁あって七月に河井継之助が通った八十里越えをマイクロバスで福島側へ往復しました。峠には大変な歴史があり人々がそれを越え祝いや、悲しみや、憎しみもあったことでしょう。そして、もくもくと、雨の中を、雪の中を越え、いや越えなければならなかった出来事があったに違いありません。史実は勿論ですが自分なりの思いも是非お寄せ下さい。